



川系男子の『川と人』めぐり No. 29～桜川～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』
めぐり

研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きでしょうがない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介していきます。

♪夕空はれて秋風吹き 月影落ちて鈴虫鳴く
思えば遠し故郷の空 ああわが父母いかにおわす

（明治唱歌『故郷の空』 作詞：大和田建樹，作曲：スコットランド民謡）



図1 夕時の桜川と筑波山系（宝鏡山）

1. 黄昏の川

真夜中の更け行く夜空には冬の星座が南中してくる季節となった。周囲の木々も色づき始め、秋も深まりだした。2014年10月19日の夕方、自転車で近くの川までふらりと出かけた。筑波大学のキャンパスから東へ2 kmほどいったところに桜川が流れている。大学から近い川ということもあり、時々なんの用も無いのに行きたくなることがある。

皆さんは川に行きたくなる瞬間はどんな時だろうか。運動したい時、生物と触れあいたい時、あるいは落ち込んだ時や辛い時、忙しさから抜け出したい時など色々な場面があるだろう。物事に対し、自身のピントが合わなくなる瞬間は誰しも経験があると思うがそんな時、川に行きただじっと川の流れをみつめていると自身が色々な雑念から抜け出すことができる。私にとって頭の中を整理するのに川はとて

も有効な場である。

桜川に着いた頃には日没が迫っており、川面は少し頬を染めていた(図1)。田園地帯の中に身を置き、遠くに筑波山を望むことができる。わずか川幅 10m ほどの田園地帯を流れる小さな川だが、これが癒しを求めて訪れる人には心地よい。桜川の堤防に腰掛け、川をみつめた。近くで聴こえる川のせせらぎ、遠くで聴こえる野鳥の鳴き声、時々、大きな魚が川の中から飛び出し、水面をたたく。乾き気味の心がじわりじわりと満たされていく。

ピントが合わなくなった時の川での黄昏は重要な時間である。

2. 桜川の概要

桜川は水系の支流で、桜川市の鍬柄山(274.5m)に源を発し、水源池である鏡ヶ池から流れ出る。旧岩瀬町、旧大和村、旧真壁村のあたりを通り、筑波山麓の田園地帯を流下し、最下流部で土浦市の中心街を貫流し、霞ヶ浦に注ぐ流路延長約 63 km、流域面積約 350 km²の河川である。古くは筑波川、伊佐々川とも呼ばれていた。古くから桜の名所(特に磯部稲村神社付近)として有名で、「西の吉野、東の桜川」と並び評されるほどである。桜川市の磯部稲村神社参道周辺の桜川磯部公園のヤマザクラは「桜川のサクラ」として国の天然記念物にも指定されている。桜川周辺の美しさは平安時代から有名で、紀貫之のこんな歌碑も残されている。

いつよりも 春べになれば 桜川 波の花こそまなくよすらめ

水戸的那珂川の支流に桜川という名前があるが、これは偶然ではなく、水戸光圀が利根川水系の桜川のように桜の名所を水戸にもつくりと敢えてその名前にし、桜並木を整備したためとも言われている。

また、室町時代には世阿弥による謡曲「桜川」が著されており、磯部付近の桜川での悲話を物語としている。

また桜川は農業用河川として役割を果たしており、新田開発にも大きく貢献した川である。古くは江戸時代に二宮尊徳が桜川上流部に荒廃した青木村を救うべく呼ばれ、青木堰の建設に着手したことで知られている。

このように桜川は歴史的にも産業的にも重要な河川であり、人々に親しまれてきた川である。

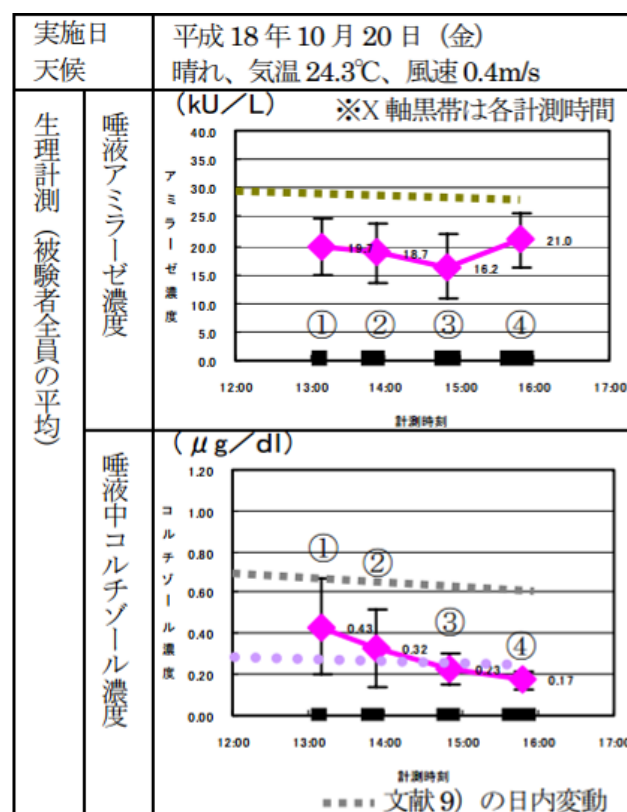


図2 実験結果(国総研資料より)

3. 川の癒し効果

今回、黄昏を求めて桜川にやってきたが、そもそも川に癒しを求めるといのは医学的、科学的見地ではどのように評価されているのであろうか。

国土交通省国土技術政策総合研究所が行った研究(図2)で癒し効果を計測したのものがある。富田らはストレス緩和状態にある際に多く分泌される唾液アミラーゼとストレス状態にある際に分泌される唾液コルチゾールに着目した。会議室で計測した通常時より、河川で計測した際にどのような差があるかを調べた。計測する河川環境は都市部であること、散策など人々が日常的に利用しやすい整備がなされていることを条件に野川と荒川から選定している。

結果、会議室で計測した通常時より河川環境に滞在した場合、唾液アミラーゼ濃度は概ね上昇し、唾液コルチゾール濃度は有意に低下しており、本研究は日常的な生活の中で河川環境は急性のストレス緩和効果(癒し効果)があることの可能性を示唆している。

実際に早くから臨床経験から川の癒し効果に着目している病院もある。秋田県由利本荘市の子吉川沿いにある本荘第一病院は日常診療の中での散歩、運動療法、リハビリなどに河川敷を利用する方法、第二にイベントを企画し施設の老人や保育園児などを交えたサマーフェスタ、糖尿病患者さんを中心とする糖尿病リバーサイドウォークラリーなどを実施している。

すなわち、私が川に行ってなんとなく落ち着くということも生理的に理に叶っていたことになる。



図3 小田地区の稲作地帯

4. 土地改良史と桜川

桜川から離れ、道沿いを走っていると広大な稲作地帯が広がっている(図3)。また、田んぼの中に大きな石碑があるのが目についた。寄ってみると、この地区の土地改良に関することを記述した碑でかなり詳細に記されているので、碑の文章を原文のまま記す。

小田地区土地改良事業竣工記念碑

小田土地改良区組合員五百余名の多年にわたる宿願であった三百六十ヘクタール余の耕地は、総事業費二十九億八百万円の巨費と十ヶ年の歳月を費やして、ここに圃場整備事業が完了した。そもそもこの地域は、筑波山系に連なる宝鏡山の山麓に広がり、筑波町のほぼ中央を流れる一級河川桜川の左岸に開けた東西四キロメートル、南北二・五キロメートルの水田地帯である。ここに産する米は、桜川の水及び八幡川常願寺沢の清流を集めて水源とし、古来より良質美味の声価を得て来ている。当地域は歴史的にも大変古くから開拓が進み、中世の豪族小田氏の本拠として栄えた。古文書等によれば天正以前より開かれた水田に引き水をするため、寛永十年に君島村との協定がなされ、小田村組合が桜川上流の土取場に杭打ちして、土のう積みした堰をつくり水源とした。さらに元禄十一年頃導水路の開削に着手し、約一里半の完成を見たのである。その後明治四十三年五月二十二日水利権の許可を受け、土のう堰を取り除き水門を作り、余水吐及び土砂吐を設け、引き続き大正十年四月現在のコンクリート堰に改築し今日に至ったのである。このように小田地区農民の開拓耕作者意欲は大きなものがあつたことを示している。しかし農業振興上、重要な農道、用水路の整備はあまり進まず現在に至っており、農地区画の広狭・曲折・形状の悪さ等さまざまな悪条件が重なって労働生産性の不合理に悩まされて来たのである。この間古文書によると、寛文九年小田村大形村より大田村への水論訴状、寛文十年水論に大田村よりの返答書、同年小田村組合堰三ヶ村水引きにつき議定書、貞享

四年小田村大田村くみ水覚書、元禄四年小田組合大堰水門普請入目割付之覚、元禄十四年小田堰関係証文覚書等々、その当時の騒動や調定は村人の苦勞の連続であり、当時の大きな社会問題であつたことを如実に物語っている。この様な歴史的背景をふまえ、現状の悪条件を打開するために早くから農業経営の基本的条件である土地改良基盤整備事業の重要性が痛感された。又将来大きな発展が期待される研究学園都市の近郊農業地帯への転換を計り、学年地区との調和ある発展を念じながら、県並びに町の指導と発起人及び役員の努力により、昭和五十三年基礎調査に入った。二年間の調査を経て、昭和五十五年組合員五百余名の署名を以て事業申請を行い、同年四月採択を得て事業が着工開始。頑調な工事経過をたどりながら、その後若干の事業計画計画変更があり、特に余水吐大水門の改修等を行い、ここに全工事完了の運びとなった。今や用排水路、耕作道路が整備され、集団化された農地に大型機械化による農業経営の合理化と、農産物物価価格の国際競争にも打ち勝てる農業経営の合理化と、農業生産の選択的拡大が可能となった。今後中核的農業の育成を計り、農産物価格の国際間競争にも打ち勝てる希望が湧いて来たのである。顧みればこの事業の完成は関係当局と役員を中心とした組合員が一丸となり、事業の推進・換地作業・工事の安全遂行等に日夜にわたり努力奮闘したその苦勞の賜物であつた。又大きな希望を胸に秘め、是が非でも事業成功を目ざして、意欲的に取り組んだ多くの先生達の努力があつたことも特筆しなければならない。今ここに記念碑を建立し、その経過と関係者並びに全組合員の名を記し、後世に伝えるものである。

昭和六十二年十一月吉日

小田地区土地改良区 理事長 大曾根通也 撰文

工事概要

着工 昭和五十五年

区画整理工事完了 昭和六十一年度

受益面積 三百六十ヘクタール

総事業費 二十九億八百万円

組合人数 五百十五名

桜川に堰を築いたことで周囲の農業生産性が著しく向上したのがよく分かる。碑文を読むとその川の背景や地域にとってこの農業開発がいかに重要であつたがよく分かる。



図4 夏の桜川と筑波山系（図1と同じ角度）

5. 喧騒から抜け出して

なんとなく出かけられる川が近くにあることは幸せなことだ。日本のあちこちに無数の河川があり、都市部であっても田園部であっても近くに大小さまざまな河川が流れている。皆さんも日常にちょっと疲れてピントが合わなくなった時は川に癒しを求めてみてはいかがだろうか。

川でぼーっと過ごすことで、行き詰っていたことが小さなことと感じられることもあるし、新たなアイデアが浮かんだりすることもある。

1日の中で変化する川風景の移ろいの中で現れる瞬間的な美しさは行った者にしか味わえない。最後に同じ場所の違う時期（夏）の写真を紹介する（図4）。

参考文献

1) 茨城県土木部河川課，「いばらきの川」の紹介，第5回桜川と謡曲（桜川），2011。

2) 富田陽子，伊藤嘉奈子，藤田光一，唾液アミラーゼと唾液中コルチゾールによる河川環境の癒し効果の計測に関する基礎的研究，土木学会第62回年次学術講演会講演集，2007。

【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りには秋の川を旅すること。

